五月作品

――☆今月の四人☆（小島ゆかり選）――

桜木町

奥村晃作＊東京

チャプチャプと音立てて遊ぶ波たちの時にしぶきて我が顔ぬらす
漠然と想い出すのみ「桜木町」高架の電車が焼けし大惨事
自己防衛のために平気でウソつくをそれも有りかとこの頃気づく
我はブルーの妻はピンクの羽毛布団ゲットす八階特設売場にて
結局は強い上手が勝つようだトーナメントの〈最強戦〉見るに

骨の母

津金規雄　神奈川

窓ひろく浦賀の湾をのぞむ部屋に九十二年の生を終へたり
雛あられの脆さとなりし骨の母を長く重たき箸もて拾ふ
早春の花とりどりに咲く参道たどれる我にいま母は亡し
よりゆきて白梅のまへに瞑目すよびもどしたき記憶のために
「私のこと歌にしないで」さう言つた妣のことばをいま歌に詠む

月集スバル

大き抵抗

水上芙季　神奈川

お互ひに起きてゐたのね午前二時話しかければ「ほんまや」と言ふ夫
赤ん坊の大き抵抗にあひながら小さき手を小さき袖口に通す
赤児の泣きごゑに疲れつつこのこゑが過去になるのはすぐそこのある日
八重咲きのチューリップ卓に飾つたらぽんぽん春が生まれくるほら
二月つてもう春なのか赤ん坊に「もうすぐ春よ」と言つたのだけど

札幌に行けば

松尾祥子　東京

札幌に行けば会へると思ひゐしに後藤美子さん逝きてしまへり
後藤さんの語尾の「す」の力強き声よみがへり来る雪降る午後は
後藤さんに会ひたくて読む『釦の詩』『十年日記』『ゆきぐも茜』
『勤め着』から『残果』まで歌集五冊残し天に還りぬ後藤美子さん
アッサムにミルクたつぷりを好みたる後藤さん偲び今朝も飲みたり

――☆――☆――

水島晴子　兵庫

集落が古き駅舎が映り出で疎開の日々が苦くこみ上ぐ
栄えたる本家の跡地スーパーが店びらきして日々にぎはふと
２００２年初春ウィーンに楽きよくみちびきたりきはやも世に亡し
定家卿有馬の湯へとたどりにし猪名野の道よ山かたのみち
補聴器がマスクにからみまた外る　食事のまへの小さきかなしみ

武田弘之　神奈川

雨止みて晴れゆく朝の軒先に透きつつ光る滴垂れつぐ
よき歌を詠みまししわけを問ひたきにその人は亡く歌のみ残る
「うまいねと言われるうちはまだ駄目だ」在りし日の師のお言葉一つ
ルビを振る要なからんと書きたるに「目守る」は何と読むか問はれつ
九十を超えて煩悩断ち切れぬままに生きをり救はれざらん

高野公彦　千葉

木々の間の落葉のうへにこぼれゐるどんぐり幾つ静けき光
この国に無駄あまたあり自販機の夜どほし点る灯の電気代
父の、母の、我の故郷は伊予にありてそれぞれ青き海に辺す
寝て起きて食べて気ままに歌詠むは〈森の暮らし〉を楽しむに似る
言の葉は優しさを持つ生き物か「お値段以上、ニトリ」のＣＭ
米寿なる吾を祝ふと集ひたる冬の湯宿の身寄り十二人
島に棲む猫いだかむと青波の玄界灘ゆく年の初めを
玄界の小島へ向かふ一家族睦月五日の浪の紺青
冬浪の玄界灘を渡り来て陽の差す島の岬に上がる
陽だまりに屈まりてゐる島の猫さやりてあれば眼を瞑るなり

森重香代子　山口

影山一男　千葉

春告ぐる夜のいかづちに震へゐるたましひのありケージのなかに
ゆふ波に芥を乗せて流れゆくささらぎの川とこしへの川
春の雲透きて降りくる柔ひかり鳥を光らせ土を光らす
習近平、トランプ、プーチンこの星を照らす月ありかすかな闇に
ウーバーイーツすこし減つたか5類へとはやり病ひの下げられしのち

桑原正紀　東京

ウクライナでロシアが使用せしといふクラスター爆弾は〈非人道的兵器〉
人道的兵器といふがあるごとき〈非人道的兵器〉とは面妖な語ぞ
クラスター爆弾は、使ふべからずと言ふ時の助詞「は」の苦しさよ
目の前の蝿でも叩き潰すごと政敵はみな暗殺したり
檻の中のナワリヌイ氏を〈病死〉させほくそ笑みしかウラジーミル・プーチン

狩野一男　東京

優勝をめざし敢へ無く13位、どうした中大？　どうする中大？
蘇民祭　民が祭りを蘇生させ千年つづけ、千年で幕
歌に拠る幸また苦悩思ひつつ歌集『バベル』を読む、読み切れず
ふるさとは滅びつつありわが姉とその娘とで守り疲れて
いづこにもハラスメントが横行し我らあぶなし祖国あやふし

宮里信輝　神奈川

わが家より二〇分ほどクルマにて走れば着けり宮ヶ瀬ダムに
半ばから山道となりトンネルを五つ抜ければ宮ヶ瀬ダムなり
宮ヶ瀬ダム入場料は無料なり守衛が幾人迎へてくれる
駐車場にクルマを停めて歩くなりコンクリートの宮ヶ瀬ダムのうへ
コンクリートのダムが堰きゐる宮ヶ瀬湖　琵琶湖に次げる二位の水量

小島ゆかり　東京

なかぞらに日ごとふくらむ短毛（たんもう）の銀毛（ぎんもう）痒からんねこやなぎ
手を口に笑ひこらへてゐる子どもねこやなぎの木の下をゆく
きさらぎのひかりあかるし着膨れてかゆいところに手がとどかない
みづからのねむりのなかをゆくわれか行きも帰りも同じ猫ゐて
すべきことわつと押し寄せ春昼の窓のむかうを蝶のわれ飛ぶ

木畑紀子　京都

見おろしの月読神社の常磐木の森にもろどり合唱団をり
枯れがれの畑の一画黄に輝（て）りてあなまぶしもよ寒咲き菜の花
つばめくる京のみんなみこの丘に新幹線延伸案決定す
公園に地質調査の札たちてひねもすつづく穴掘りの音
地質調査結果に新駅不可と出よ燕にかはり秘かにねがふ

島田暉　神奈川

蜘蛛の糸手に払ひつつ歩むなり樹林の中をさ迷ふ老いは
百年の欅の幹に耳をあて苦悶もらせる声を聞くなり
春来しと大手を振りて枯野ゆく後半生の緑の心
天女らのくだりて笛を吹きてゐむいつしよに鳴けるうぐひすの声
爆撃の中を逃げたる昭和の子令和の平和を生き難く住む

大松達知＊　東京

爛漫に火と水のあり　ライフログアプリのように授業している
停止線ちょっとはみ出す自転車の、清げであって清らではない
ももいろの石の名前を知りたくてバンドの名前ばかり出てくる
TシャツにJIL SANDERと書いてあるJIL SANDERじゃないと言えない
ミサイルを作ればGDPは増す2杯目の白湯冷めてしまって

田宮朋子　新潟

雪の〈ゆ〉は斎庭の〈ゆ〉とぞ天降りくる雪はつかのまわが頬きよむ
きさらぎの光のなかをくるほしく飛べるいのちよ蚊柱のたつ
二月とはいへど五月のあたたかさ木の芽草の芽とまどひをらむ
いかやうに地は震へしや北アルプス峨々たる峰の隆起せしとき
北極にちかき氷の大国に邪知の王ゐてナワリヌイ死す

小山富紀子（さあ）　京都

「あえのこと」地震で今年は出来ぬとぞ田の神様は行く田失ふ
正月がめぐりくるたび思ふのか失ひし人、能登のあの景
主流から離れゆく水さびしもよ小流れとなり土に消えゆく
君と酌む心地にあげぬこの杯を今宵はここも雪降る夜ぞ
対局の画面にそつと手を入れて直しやりたや棋士の衿もと

清水正子　神奈川

赤きひも幹にまかれて伐採を待つ木よあはれ冬芽光れり
癌を病み余命半年の息子から越冬つばめの写メが届きぬ
設計時の予定寿命を越えて飛ぶボイジャーにもらはむ生きる力を
神鳴りのまにま頻き降る春の雪このイノセンス何の予祝ぞ
融けかけてべそをかきゐる雪だるま汝を忘れぬやう歌にせむ

小嶋一郎　佐賀

消極といふ外はなきわが動き妻は見てゐる昼餉を告げて
釘一つ打つことぐらゐまだできる日捲りひとつ吊るさむとして
日の陰る古屋の軒に揺れてゐる蜘蛛の巣払ふあらあらかしこ
野の果てに向かふ道筋けふは見て会ひたき人の名をつぶやきぬ
両の掌に包む湯呑みの温かさ不意に人恋ふ脈絡無けど

福士りか　青森

首をたたみ繭玉のやうに眠るらむ白鳥の群れは大寒の夜を
雪かきのなき暖冬の楽なれど雪降ればすぐに雪かきに立つ
暖冬にてはやも始まる北帰行捨てられた子のやうに見上げぬ
けふ雨水　雨水に雪のふることのなにかおそろし雪国津軽
百年を寝過ごしたるかストーブをつけずともよき二月の朝よ

藤野早苗　福岡

きさらぎの半ば過ぎれば満開の遠(とほ)の朝廷(みかど)の春は梅から
就寝のベッドで読めりうたともの時差九時間のイギリスだより
〈見る専〉と決めて不眠の夜々巡る旧ツイッターX(エックス)界隈
石板のやうな背中をほぐすべく薔薇の模様のパジャマで眠る
蘇生した古木の梅の白き花部屋より愛でる春の入り口

風間博夫　千葉

一本もピンの倒れぬ必然を見たりガーターにボールが落ちて
一フレーム二回続けてガーターのそのフレームは零点である
一投目ストライクなれば不満でもそこでおしまひそのフレームは
一フレーム二回投球したければストライクだめガーターはよい
十(テン)ピンが一本残るまた残るしつかり投げてゐるのにのこる

田中愛子　埼玉

病むがはの耳に栓されゆるやかに髪あらはるる冬のまひるま
「あ、それと」からくちひひやう追加さる返す刀で斬らるるごとく
良心にしたがひ我は二分せりひとつ残つたをんせんまんぢゆう
惜しみなくわれの歌集を褒めくるるハガキに差出人の名がなし
後藤さんの訃報がとどき寒き夜を読み返すなり「茫々」二十余首

高野公彦評論集　令和6年3月刊　二八〇〇円(税別)送料三〇〇円
歌の魅力の源泉を汲む　コスモス叢書第1235篇　柊書房
著者住所　〒272-0114　千葉県市川市塩焼二―二―二―五〇六

大松達知歌集　令和6年1月刊　二五〇〇円(税別)　送料三〇〇円
ばんじろう　コスモス叢書第1233篇　六花書林
連絡先　〒170-0005　東京都豊島区南大塚三―二四―一〇　マリノホームズ1A　六花書林

奥村晃作歌集　令和5年12月刊　二六〇〇円(税別)　送料三〇〇円
蜘蛛の歌　コスモス叢書第1232篇　六花書林
著者住所　〒175-0092　東京都板橋区赤塚七―一五―一六

橘　芳園　新潟

救はれてゐるや仏縁なきわれや仏書ひらけばすぐ眠くなる
僧なれば信心得ねばならぬかとあせり学ぶも煩悩なりき
死後信じざれど喪の経ていねいに誦みたるのちはこころすさみき
寺継ぐと育てし子からひとたびも感謝されずに父母逝きぬ
念願の無職、歌詠みになりたれど七十八歳どこかさびしい

水上　比呂美　東京

春の折り紙会館の陳列に一寸ほどの内裏びな座す
名にし負ふ湯島天神の梅咲けり三寒四温の一温のけふ
春浅き湯島天神の絵馬掛けに合格祈願の絵馬あまたあり
風はまだ冷たけれども白梅（しらうめ）のそらはとろりと甘さうな青
きさらぎの湯島聖堂をめぐりゐて方位うしなふ孔子像まへ

鈴木　竹志　愛知

プラレール線路の距離の伸びゆきてわが家の居間の狭くなりたり
新しい線路を敷きて帰る孫妻に念押す「こわさないでね」と
なにゆゑにわが家の居間を歩くのに神経使ふやレール避けむと
葛根湯医者かもしれぬ問はれたらまづ宮柊二を挙げるわたしは
文庫本『宮柊二歌集』初版より三十二年経つ改版まだか

原賀　瓔子　東京

五十年つれ添ひしすゑ背表紙がはづれたままの辞書となりたり
「らく」といふ古語であそべば〈老いらくの恋〉がまづ出る年代われは
皮膚科医の処方薬切れ、さしあたり売薬のフルコートでしのぐ
お薬の名前みたいとふとおもふフラゴナールよ、ふらここの画よ
コンビニで新聞五紙を買ひにけり小沢征爾の死去を知る朝

大野　英子　福岡

霧雨に降られて歩く　被災地を思へばくすぐられるやうな雨
三千歩増やしてバス代二十円得してけふの良きこととせん
アメダスも郵便も当てにならぬ世のいちばん当てにならない政治
何処からかお金が入る議員にはわからぬだらう庶民の痛み
散りきつたいちやう美し悪あがきせず散つてくれ巨大政党

鈴木　千登世　山口

娘から「帰る」とLINE届きたりたこ焼きパンをもひとつ買ひぬ
かつぶしがふはあと踊りソース匂ふたこ焼きパンは看板のパン
「三十秒チンしてどうぞ」大き手でパン包みつつ主の言へり
つぶやきの増えて面差し尖る子にたこ焼きパンを湯気ごとわたす
週末の度帰宅する娘ゐて「親孝行ね」と母に言はるる

小島　なお＊　東京

Who done it?（フーダニット）は犯人当ての物語　駒を進めていま春に入る
Why done it?（ワイダニット）は動機を巡る物語　手に転がせる六面ダイス
How done it?（ハウダニット）は方法を探る物語　まだ手つかずの草地を歩む
ふりかけのように桜の散りかかるあかるい屋根が妹の家
納豆の糸でつながるテーブルとヤクルト1000が生きる約束

十五万記載漏れとぞ指摘されわが納めけり一万五千円　小田部　雅子　静岡

記載漏れ何千万の政治家は訂正をせり収入源「不明」

国ぢゅうのさめた視線の目守るなか罰のがれんとす罪ある者ら

二十一年共に暮らせし猫の「ぶちゅ」カメラ目線の写真があらず

おしつこを伝へてミュウと鳴きし声、抱かれてわれを見あげし視線

降る力満ちてふりゐるこの雪に触れたくてひらく朝の手のひら　斉藤　梢　宮城

退院して一か月後の入院の南病棟の父の窓も冬

点滴の人となりたる父のこと思へばいつもの味噌汁しよつぱい

津軽弁で看護師さんと電話する　故郷がああ近くて遠い

「十一羽、今日はいたよ」と鴨のこと話す夫と聞くわれの夜

うたを味わう―食べ物の歌　◉高野公彦

五月の味

―シャコのうまさ―

厨戸は夏いち早し水かけて雫したたる
蝦蛄のひと籠　北原　白秋

少年のころ、近くの浜辺でシャコをとったことがある。シャコは浅海の泥の中に穴を掘って棲んでいる。シャコが手でとれるのは大潮の干潮の時だけだ。持ってゆくのは、囮のシャコ一匹、それにスコップ。

砂浜の波打ち際（といっても瀬戸内海だから波などほとんどなかった）にしゃがんで、スコップで浅く泥を掘り、シャコの穴を見つけると、そこに囮のシャコを頭からすべりこませる。囮は尻尾を藁で軽くしばっておき、藁の端をつまんで囮をコントロールする。しばらくすると、囮におびかれて中のシャコが這い上がってくる。それを素早くスコップで掬う、というやり方である。根気の要る方法だが、つかまえたシャコが手の中で躍る時、体じゅうに快感が広がる。

何匹かつかまえると、いそいで家に帰り、母に茹でてもらう。その、ほかほかと湯気の立っているヤツに少し塩をふって食べる。うまかった。今思うと、シャコの肉は、蟹や海老に似て、それよりやや淡泊な味だ。

その後、あれほど新鮮なシャコを食べたことがない。

右の歌は、昭和二年の作。これはたぶん漁師から買った、とれたてのシャコであろう。爽やかな初夏の季節感と、また作者の健康な食欲が伝わってくるような歌である。

歌集『白南風』より。

蝦蛄食みて蝦蛄の歩みを思ひゐる午前
一時の地下カウンター　内藤　明『海界の雲』

これは現代の歌。シャコは後ろへ後ろへ進む。白秋の時代には籠の中で雫をしたたらせていたシャコが、今では地下の寿司屋の冷たいガラスケースの中におさまっている。時代は大きく変化したのだ。